





写真番号	タイトル	画像	説明文
PY01	到着		パラグアイに移住する人々は、横浜を出発してから約45日でブエノスアイレスに上陸する。ここで約2日間、アルゼンチン国通過のための検査、市内見物を行ない国際列車で一路パラグアイに向って出発、約36時間でエンカルナシオン市に到着する。
PY02	エンカルナシオン移住者センター		約36時間の汽車旅を終えた移住者は先輩達の出迎えをうけて、入国や永住のための手続きが行なわれる。センターには300名の収容施設が完備し、事業団事務所もある。
PY03	小学校と仮宿泊所		それぞれの手続きを終えた移住者は当日あるいは翌日、出迎えの先輩達と一緒に入植地であるアルト・パラナやイグアスに向う。入植地には仮宿泊所(後に小学校となる)に落ちつき、入植の第1歩が始まる。
PY04	入植初期		宿泊所で一夜を過ぎた移住者は当団の係員から移住地の地形、土質、林相その他重要な事項について詳細な説明がありそれ等の説明を頭に入れて、1~2日間実際に入植地区を見聞し、各自の意志によって入植ロッテの選定が行なわれる。ロッテが確定すると実際の開拓準備が始まり約1ヶ月前後で各自のロッテに移り本格的な作業にとりかかる。
PY05	水田		移住地の造成は幹線道路が高台を通過する関係上、1ロッテ中には台地が約50%、傾斜地約30%、低地約20%前後の割合になっているロッテが多い。低地はティエラ・ロシヤに対してネグロと呼ばれそ菜畑や水田等に活用される。
PY06	小麦の脱穀		パラグアイにおける小麦栽培は天候に非常に左右されやすく、幼穂の形成期や開花期、収穫期等の天候如何によっては収穫皆無になることもある。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY07	トマト栽培		アルゼンチンの北部や、パラグアイでトマトはごく限られた一部の人々のものであったが、日本人が入植し、大量に栽培するようになってからは大衆化され、また高級野菜も多量に出荷するようになって一般住民から非常によろこばれている。
PY08	マテ茶		日本人がお茶を愛用するのと同様、パラグアイ人にマテ茶は日常生活になくてはならないものである。マテ茶の栽培は今後大巾な伸展を期待することは出来ないが、天候に左右されない、労力が少なくすむ、比較的悪い土地に栽培出来る等の理由からやはり植付けておくべき作物である。
PY09	ツング(油桐)		南米におけるツングの主な栽培地域はラ・プラタ水系、パラナ河沿岸、アルゼンチンのミシオネス州、パラグアイのイタプア地域で、約25,000トンのツング油が生産されている。現在日本人移住地のツング植付面積は約7,000ヘクタールで、1970年頃には約5,000トン前後のツング油が生産される見通しである。
PY10	ポメロ		最近日本人移住地では柑橘栽培が盛んで特に高級品の植付けが行なわれている。チャベス、フラム移住地からはすでに出荷が行なわれている。
PY11	マテ茶第一次加工工場		日本人移住地には約2,000ヘクタールのマテ茶が植付けられ、入植初期のものは8年生になる。収穫の時期に工場はフル回転し、ここで熟成され、粗びきされたものはカンチャダーと呼ばれ、第二次工程でモリーノとなり市販される。
PY12	農業協同組合		移住地における農協の果たす役割は重要で、農協本来の経済活動の他に市町村役場的業務も行なわねばならない。しかし3年、5年と経過するうちに本来の経済活動に重点が移っていく。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY13	フラム指導農場		フラム移住地の開設に伴って設置されたフラム指導農場は畜産を主体とした指導を行なっている。約200ヘクタールの農場には各種の施設がなされ、移住者の営農相談に応じている。なお農場内にはフラム診療所もある。
PY14	授業		各移住地は開設と同時に小学校が設立され、日本で小学校の1年生も3年生も、この小学校ではすべて1年生に入学し、移住地における子弟教育はパラグアイ国の教育法に基づいて行なわれる。
PY15	小学校の先生		パラグアイ国における先生の資格は学歴、経験年数等により1級から7級までであり、級によっては受持の学年が異なる。日本人移住地の先生は3~4年前に比べると1~3級の先生が多くなっており、当事業団の子弟教育助成費の増額により、優秀な先生が増加しつつある。
PY16	オブリガードの中学校		エンカルナシオンとアルト・パラナ移住地の中間にあるドイツ人移住地にはキリスト教団の経営する立派な中学校がある。ここにはドイツ人子弟にまじって日本人子弟も20人程入学している。
PY17	ツング搾油工場		ドイツ人移住地であるコロニア・ウニダス農協の経営する搾油工場は年間6,000トン(日産20トン)の搾油能力がある。この移住地のツング栽培面積は約13,500ヘクタールでツング油の全部が輸出されている。
PY18	ドイツ人移住者の住宅		約45年前ブラジルのサンタ・カタリーナ州から再移住してきた人達は非常に安定した生活をしている。投機的で労力を必要とする作物はあまり栽培せず、永年作物を主体として畜産を加味した営農を行なっている。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY19	移住地の造成(1)		<p>約84,000ヘクタールを有するアルト・パラナ移住地は1960年から造成工事が始められ、現在約350家族が入植し営農に励んでいる。移住地の造成は最初航空測量が行なわれ、それに基づいて測量図が作成され、この図面によって重機械類が活動する。</p>
PY20	移住地の造成(2)		<p>ブルドーザやスクレーパーによって荒道が造られ、橋梁工事の進行に併行してグレーダーで道路の仕上げが行なわれる。幹線道路有効幅員は8メートル、支線は6メートルである。</p>
PY21	カアレンズ港		<p>アルト・パラナ移住地はアカカラジャ、ピラポ、カアレンズの地区に区分され、それぞれ港をもっているが、中でもカアレンズが最も良港で移住地の各種農産物の運賃を軽減するため当事業団が築港工事を行なっている。</p>
PY22	ピラポ川		<p>アルト・パラナ約84,000ヘクタールの間を流れるピラポ川は川巾、水量とも移住地最大である。この川をはさんでアルト・パラナ市街地が設定されている。</p>
PY23	アルト・パラナ事業所		<p>市街地の中心部に当団のアルト・パラナ事業所があり、造成関係、営農指導関係、一般事務関係の職員がそれぞれ駐在し活躍している。</p>
PY24	アルト・パラナ診療所		<p>診療所は日本から派遣された医師産婦人科1名と嘱託の医師2名(外科、歯科)が診療にあたっている。レントゲン、手術、入院設備があり特別の施療を要する患者以外は不便を感じない。</p>

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY25	アルト・パラナ指導農場		1960年開設された指導農場ではツング、ラミー、ケナフその他各種作物圃場を整備し、営農上の資料を移住者に提供するとともに、各種作物の栽培比較試験も行なっている。また農場内には営農指導のための教室も完備している。
PY26	電信電話		各移住地間の連絡にアスンシオンを中心としてそれぞれ無線ラジオが活躍している。アルト・パラナは電話施設があるので直通で連絡ができる。
PY27	派出所		移住地のセンターにはそれぞれ警察署があり、署長を含め5～10人が駐在している。これらの警察署は2～3ヶ所の派出所をもち移住地の治安の任にあっている。
PY28	教会		アルト・パラナの市街地にはメソジスト派の教会があり、日本人牧師が駐在し、主として子弟の教育面で活躍している。
PY29	仮宿泊所		入植した移住者は約1ヶ月間この仮宿泊所で生活する。この間先輩移住者から野菜等の無料提供をうける。提供をうけた人達は後続の移住者にまた提供をする。
PY30	製材所		入植当初の移住者は極く短期間に住宅の整備をする関係上、農協等の製材所が建築用の板材を1戸当り約10平方メートルを準備し便宜をはかっている。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY31	伐採		<p>入植当初は家労力に応じて3~5ヘクタールが現地人を雇って伐採させる。樹木の性質等がわからないうちは自家労力による伐採はさけたほうが安全である。</p>
PY32	寄焼		<p>伐採後は枝打ちを行ない、30~40日乾して山焼きを行なう。残木は寄せ集めて更に火を入れ畑をきれいにする。</p>
PY33	木挽		<p>山焼きした後有用材は住宅、畜舎等の建設用に製材される。移住地における建築費は工賃及び金具等が主な費用である。</p>
PY34	播種		<p>粒種子の播種にはすべて写真のような播種機が使用される。これはあまり力を必要としないので女子でも簡単に使用できる。</p>
PY35	マイルス		<p>永年作物の植付と同時にとうもろこしや大豆等が間作されるが3~5年間は栽培出来る。</p>
PY36	水稻		<p>日本人の体質から米と味噌は欠くことの出来ない食料でどこの家庭でもつくられている。倉庫に50~100俵前後の米を積んでいと主人の顔も自然と円満になる。</p>

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY37	小麦		パラグアイにおける小麦の生産地はイタプア県、ミシオネス県、アルトパラナ県等が主な地域で日本人の多く入植しているチャベス、フラム地区でも一部栽培されている。
PY38	3年生ツング		永年作物も写真のように大きくなると殆んど間作は不可能となり、短期作物畑は新しく伐採される。来年は少しではあるが収穫できる。
PY39	ラミー		指導農場ではラミー、ケナフ等の繊維作物やその他の多年性作物の試作が行なわれ企業化するための研究も続けられている。
PY40	住宅		入植当初は1棟だけだったものも3年位の間には4棟ぐらいになっている。写真中央の山はとうもろこしを脱粒した芯である。
PY41	炊事場		入植2～3年間はなかなか家の中までは手がまわらない。日本から持参したものと、現地で調達したものが同居しているが、5年目頃には現地調達品のみとなる。
PY42	新住宅		入植5～8年程度になると営農状況も一段落、住宅や農機具、その他身のまわりの整備にとりかかる時期になる。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY43	登校		<p>入植時の宿泊所が後に小学校となり、子弟はそれぞれの家から登校する。遠い人は4km前後を通学する。</p>
PY44	授業		<p>パラグアイの先生は日本の先生よりもきびしく、スペイン語の発音などは30回も40回も出来るまで復習させられる。生徒は涙を流しながらも一生懸命である。</p>
PY45	運動会		<p>年2回春と秋に運動会が行なわれ、父兄は沢山料理をつくってわが子の応援にでかける。</p>
PY46	講習会		<p>指導農場では毎年各種の講習会が開かれ、語学、経済、社会、営農、料理、衛生等にわかれて1～2週間実施される。</p>
PY47	青年運動会		<p>移住地の青年会主催の運動会も行なわれ、各移住地の青年が参加する。この運動会が縁で毎年何組かのカップルが誕生する。この他春秋2回、オールコロニア野球リーグ戦も行なわれている。</p>
PY48	敬老会		<p>移住地あげての行事には、併せて敬老会も開催される。65才以上が出席する権利があり、主催者提供のビーノ(ブドー酒)を飲み終った頃「オレはまだ若いんだ」と小虎になる人もいる。</p>



写真番号	タイトル	画像	説明文
PY49	アサード(焼肉)		各種の集会、祝日等のつきものはアサードである。牛の肉を1kg程度の大きさにし、香辛料に浸けてから写真のようにして焼く。
PY50	モチつき		日本と異なり南米の正月は真夏である。汗をふきながらでもモチを食べると正月の気分になるから不思議である。
PY51	魚釣り		日曜、祭日等の休日にはピラポ川、パラナ河へ釣りに出かける人が多い。これらの河は魚が豊富で手ぶらで帰る人はいない。
PY52	路店		各都市には公設の市場があり、日本人も相当数店を出している。市場内で営業出来ない人は路店を出して果物やそ菜類を売っている。
PY53	政庁		パラグアイの首都アスンシオン市(人口約40万)の東南部に位置する政庁は南米で最も古い建物に属し、パラグアイ、ウルグアイ、アルゼンチンとブラジルの一部を支配した当時の面影が残っている。
PY54	国立勸業銀行		産業開発を主とする市中金融および外国為替、借款業務等を取り扱いパラグアイ国で唯一つの国立銀行である。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY55	ホテル・グアラニー		アスンシオン一番の高層ビルで地下2階、地上10階、最も近代的設備をもったホテルである。
PY56	第1号汽関車		アスンシオンとエンカルナシオンを結ぶ390kmの鉄道は1865年に開設され、日本よりも約10年早い。
PY57	マテ茶		パラグアイ人は旅行中でもマテ茶を携行し、自動車やバスの中で魔法ビンから湯を注いで飲みながら旅行を楽しんでいる。
PY58	親善の橋		ブラジルとパラグアイを結ぶ国際橋は「親善の橋」(プエンテ・デ・アミスタ)と呼ばれ、イグアス移住地を通過する国際道路を結んでいる。
PY59	イグアスの滝		ブラジル、アルゼンチン、パラグアイの三国にまたがるイグアスの滝はナイアガラをしのぐ規模をもつといわれ、「悪魔の喉」と呼ばれる中央の多岐の落差は約90mに及ぶ。
PY60	国際道路		アスンシオンからクリチバを通り、サンパウロまで約1500kmの国際道路は、イグアス移住地の中央部を通過している。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY61	国境の税関		パラグアイとブラジルを結ぶ国際橋のたもとには立派な税関があり、交易上の業務を行なっている。税関中央部には各国の時間が一眼でわかる地方標準時刻版がついている。
PY62	牧畜		イグアス移住地の日本人は永年作物、短期作物に加えて家畜の導入を行ない多角的経営の基礎づくりに日夜努力している。
PY63	小学校		イグアス移住地は生徒数が少ないので現在1校が開校している。今後生徒数が増えるにしたがって整備拡充されることになっている。
PY64	道路造成		道路をつくるのには、ごらんのような重機械が活躍する。毎日約400～500mの道路がつくられていく。
PY65	造成機械		事業国のイグアス事業所には各種の造成用重機械が配置され、移住者の入植に併行して造成工事が進められている。
PY66	イグアス事業所		約87,000ヘクタールのイグアス移住地を管理するこの事業所には一般業務、営住農指導、造成工事等担当の職員が駐在し、移住者の指導にあっている。

写真番号	タイトル	画像	説明文
PY67	ペドロ・ファン・カバリエ 口飛行場		アマンバイ県内には約120家族の日本人がコーヒー栽培を主として活躍している。ブラジル国境にあるこの町は両国の貨幣が通用する。
PY68	倉庫		この地区の移住者はアマンバイ農協を組織し、小麦、米、コーヒー等の保管倉庫を有し、有利な経済活動をしている。
PY69	コーヒー		パラグアイ国のコーヒー生産地域はアマンバイ県が主で、国の特別の便宜をうけながら、各自の所有面積の60%以上にコーヒーを植付けている。
PY70	養鶏		3～4年生のコーヒー樹が大部分であるこの地区は、現金収入を図るための養鶏が盛んに行なわれ、ペドロ・ファンや、ブラジルのポンタ・ポラン市に出荷している。
PY71	青果店		日本人のそ菜栽培技術は世界一流といわれどんな小都市にも日本人の青果店がある。栽培から販売まで一貫して行うため、店頭の商品は常に新鮮であり評判がよい。
PY72	ブドウ		パラグアイ国における日本人初の移住地ラ・コルメナはブドウ酒で有名、特に「コルメニータ」(コルメナ娘)は有名でアルゼンチン等にも輸出されている。